



**地域個性踏まえ
観光産業振興を**

開氏が強調

沖縄総合事務局運輸部は13日、「滞在交流型観光に関する地方シンポジウム」を那覇市の沖縄総合事務局2号館で開いた。写真。観光庁の観光中核人材育成事業

の一環。観光産業の活性化や人材育成が目的で、県内の自治体や観光協会など12団体や企業が参加した。



開梨香氏

沖縄総合事務局運輸部企画室の古謝昌彦観光振興官

は、冒頭で県内の観光はリピーターが増加しているにもかかわらず、目的地に行くだけの通過型観光になっている点を指摘。「長期滞在型を推進し、観光交流の取り組みのヒントにしてほしい」と、シンポジウムの趣旨を説明した。

カルティベート(那覇

市)の開梨香社長が講師を務め、「地域が元気になる滞在交流型観光とは？」と題して講演した。開社長が取り組んできた離島体験交流促進事業の例を挙げ、離島で民泊などの自然体験を通じた学びや経験が、離島の持つ特殊性や魅力を知ることができると提言した。

また、この10年で沖縄の観光が変わったと主張。東村などやんばる地域はブランド化したとし、10年間で観光客数が約5倍になった事例を挙げた。その背景には、自然体験だけでなく、地域の生活・文化を紹介する地域住民との積極的な交流があったと説明した。

開社長は「自然や文化の残る沖縄ではそれぞれの地域に個性がある。地域を主役に、地域の個性を踏まえた次世代につなぐ観光産業を行っていくべきだ」と強調した。